第1200回（2012年度 第11回）10月30日　会員セミナー

Europe's Role in the World Economy

講師：ローランド・ベルガー 氏
（ローランド・ベルガー・ストラテジー・コンサルタンツ 創業者 名誉会長）

ユーロ圏の経済危機は金融不安と共振し、その影響が世界経済全体に及ぶ懸念も払拭できず、欧州各国首脳のさらなる政治決断が迫られている。ヨーロッパ経済の現状と今後について、世界的なコンサルタント会社の創業者であるローランド・ベルガー氏が語った。

ヨーロッパ経済の最大の強みはダイバーシティの活用

2008年から2009年にかけて起きた経済危機の後、先進国の経済はいまだに回復に至っていない。とりわけ、ヨーロッパ経済が世界経済に及ぼす影響は依然として大きい。EUはGDP比でアメリカに次ぐ規模の経済圏であり、フォーチュンが選ぶ世界の上位500社の3分の1も、EUの企業が占めている。研究開発支出の面でも、アメリカに次いで世界第2位の地位にある。

ヨーロッパ企業の強みはどこにあるのか。工業生産、インフラ整備、リサーチ力などさまざまな要因があるが、特に注目したいのがダイバーシティ（多様性）だ。域内にさまざまな歴史や文化、科学を抱えるEUは、それを一つにまとめてきた。そうしたダイバーシティの活力を武器に技術の向上、イノベーション、顧客満足の追求などを進め、競争力を保ってきたことが、ヨーロッパ経済の最大の強みといえる。

ユーロ導入により二つに分かれたヨーロッパ諸国

ヨーロッパの統一通貨ユーロは、世界の通貨の26%を占めており、世界経済に大きな影響力を持っている。発足当時のレートは、1ドル＝0.85ユーロだったが、その後はどんどん価値が向上し、一時は1.60ドルに上昇した。ユーロ導入前と比べて各国のインフレ率は低下し、経済成長が続いた。それに伴って、それまでは金利の高かった国も含めて金利が低下した。

その結果、ユーロ諸国は二つに分かれることとなった。かつて金利が高かった国はバブル経済となり、人件費が向上し、債務が増え、競争力を失っていった。これに対して、もともと金利の低かった国々では必要に迫られてさまざまな改革を進めたことにより、経常収支が黒字となり、世界的な競争力を増していった。

そうした中で起きたのがユーロ危機だ。これにより2009～2011年のヨーロッパでプラス成長を示したのは、ドイツなど数カ国のみ。後はすべてマイナスとなり失業率も上昇した。

赤字国が取り組む四つのアクションプラン

こうした状況を踏まえて、南欧を中心とした赤字国では四つのアクションプランに取り組んでいる。一つ目は構造改革だ。人件費や福祉予算などを削減し、公債を削減し、バランスの良い予算にする。二つ目は銀行のシステム改革だ。スペインへの救済資金の投入、一元化された預金保険制度などに加え、最近では新たな銀行連合のプランも持ち上がっている。三つ目はつなぎ融資であるブリッジ・ファイナンシングだ。ギリシャ支援策を発端に、アイルランド、ポルトガルにもIMFによる支援が行われ、ESM（欧州安定メカニズム）による欧州金融安定基金も設けられた。そして四つ目は財務協定だ。厳しい予算ルールにのっとった予算化がユーロ導入17カ国中12カ国で行われている。

こうした四つのアクションプランは徐々に効果を発揮し始めている。特にアイルランドでは人件費が低下し、経常収支も黒字化した。ただし、すべての国で効果が出るまでには、まだまだ改革を続ける必要がある。

今後は民間資本を活用した成長プログラムが必要

今後は、四つのアクションプランを継続することは当然だが、同時に成長に向けたプログラムが必要になる。だが、政府にはそのための資金がない。そこで、民間資金の導入がポイントになる。ヨーロッパで必要な電気通信、エネルギー、水道、道路などの各分野におけるインフラ投資の総額は170兆ユーロという膨大な額になる。規制緩和などにより、そこに民間資本を呼び込むことが必要だ。民間企業が活力を取り戻し、ヨーロッパ各国がユーロ統一への自信を持つようになることが、世界経済の安定性を確保していく上でも非常に重要である。